

第1学年「みがく」学習活動案

授業者 和氣 拓巳

2月20日（金） 1階C室 10:00～10:40

1 単元名 こどものあらわれ「流動するプロジェクト」

2 単元について

「みがく」の時間は、学校という環境の中で自分のやりたいことを見つけ、活動する時間としている。その現れは多様で、色水やシャボン玉、あやとり、実験など、これまでに様々な活動が行われてきた。それらは、明確な目的や目標がある活動とは言い難いものである。また、継続性に乏しく、思いつきで始めた活動が、泡のように消えていくこともある。しかし、子どもたちの関心そのものが、本来流動的なものであるならば、そうしたあり方は否定されるものではない。むしろ、「やってみたい」という思いが生まれた瞬間に、それを実行できることに、この時間の価値があると考えられる。実際にやってみて、「想像していたものと違った」と感じた経験は、誰しも身に覚えがあるだろう。一度やってみることが保証されているからこそ、子どもたちは次の活動へと踏み出し、様々なものやことと出合っていく。

子どもたち一人ひとりが、同じ教室空間でそれぞれが異なる活動に取り組んでいると、自然と隣にいる他者の活動が目に入ってくる。そこから新たな関心が生まれ、互いの活動が変化していく。こうして教室のあちこちで展開されている活動は、サークル（分かち合う）で共有される。その日の活動について、伝えたいと感じた子どもが言葉を置き、聴き手は自分とは異なる活動を認めたり、時にはアドバイスしたりすることもある。

一人ひとりが自分の関心事に取り組めることは、他者の活動を認めることに繋がっている。それは、「私が私のままでいい」という感覚を支え、教室に安心感をもたらす。そうした経験が重なり合い、リズム的に繋がりながら、子どもたちはアセンブリッジ（固定されない流動的なまとまり）を形成し続けていく。

低学年であそびこむ経験は、時空を超えて立ち現れることもある。例えば1年生で取り組んでいたシャボン玉の活動が、6年生になって再び繋がり、新たな活動として現れることもある。しかし、そのような展開は誰かがあらかじめ予想できるものではない。そもそも、ある出来事がどのような経験へと繋がっていくのかは、そもそも誰にも見通すことのできないものである。だからこそ、子どもたちに必要以上に目標を設定させる活動ではなく、子どもの「いま-ここ」を出発点にして、子どものために自分に何ができるかを考える教師の役割が重要である。それは、あらかじめ設定されている学習内容が存在するという発想ではなく、子どもにとってどのようなことが学びだったのかをともに考えていく発想である。

本時は、6月後半から始まった「みがく」の長い文脈の途上にある1コマである。1月中旬の時点では、教室には以下に示す活動が見られた（名前／活動内容）。

つくるチーム / 段ボールで部屋づくり	ピタゴラスイッチ / ピタゴラスコースづくり
生き物宝石化石チーム / ヤモリの家づくり	折紙 / 折り紙で作品づくり
オリジナル紙飛行機チーム / 遠くにとぶ紙飛行機づくり	実験 / おもしろいと思った実験をする
工作チーム / 粘土や毛糸を使って作品づくり	バランス / 一輪車やバランスボールに乗る

2月中旬にこれらの活動のいくつかの姿を消している可能性もあるが、当日の子どもたちが何に関心をよせて活動しているのか、その姿を、参加者の方々に見ていただきたいと考えている。それは、完成した成果ではなく、子どもが何に関心を寄せ、何と関わりながら時間を過ごしているのか、またその関係性の中で、どのようなやりとりや変化が生じているのかに目を向けていただきたい。

3 学習活動計画（これまでの履歴については、1学年の記録を参照）

1学期 ～「みがく」の始まり～ やりたいことをやってみよう （関心について考える）	2学期～大人の「みがく」の始まり～ 色々な活動に触れてみよう （多様なものに触れる）	3学期 ～「みがく」のまとめ～ 最後にどんなことがしたいかな （やりたいことを問い直す）
---	--	--

4 本時の活動について

（1）本時のねらい

- ・自分（たち）のやりたいことを納得のいく形で進める。

（2）予想される本時の展開

主な活動と子どもの姿	留意点
1. それぞれの活動を進める 2. 分かち合う（サークル）	・教師は、自分の振る舞いが子どもにどのような影響を与えるかを常に考えて行動する。 ・状況に応じて、分かち合う時間を設定する。